

“その時”学生を動かす！ 兵法的思考を活用した教育 ～平成19年度に経験した 2件の事例紹介と検討～

佐藤 三矢

吉備国際大学・保健科学部・理学療法学科

現代社会において、経営者や会社の教育係たちから“実践的な理論”として注目され、実用されているものの中に“兵法”がある。

私は、この兵法的思考を臨床現場で働いていた時代における新人教育はもとより、現在の吉備国際大学での学生の教育でも用いている。

平成19年度になり、“1年次チューター”としての立場と、大学院生の研究指導と同時に学部生の卒業研究指導を行う“大学院生と学部生のゼミ教官”として、責任の重い新たな二つの立場が発生した。

今回、この二つの立場を持ち合わせる教育者としての活動の中で、それぞれにおいて有意義な経験ができ、“兵法”に共通する興味深い側面を見出せたのでリアルに紹介させていただきたい。

キーワード：兵法、活用、学生、教育

【“兵法”と私】

兵法は、戦争が途絶えることが無かった遥かなるいにしえより伝えられてきた“集団を豊かにらしめる教え”であり、“集団の組織力を高めるための方策”とも言える。現代では、数多くの企業家や管理職向けのビジネス関連書に兵法は紹介されている。特に、『孫子の兵法』は、世界中の有名人や経営者たちに“実践の書”として愛読され、実用されている（図1）。では、なぜ約2500年が経過した今でも現役である理由について分析された3つの理由が指摘されている（表1）。表1からも判るように、『孫子の兵法』は科学的かつ現代的である。今日、本書

表1.『孫子の兵法』未だ現役の理由

1. 情報収集から状況判断、行動計画の決定に至る思考過程が“ホレシヨソリサーチ”の体系そのもの
2. 合理的・科学的な戦いの原則を主張
3. 統率（リーダシップ）の本質を指摘

が単なる兵法技術の教本ではなく、人生哲学の指導書、経営戦略の参考書として活用されているのは、このような普遍的な真理を追究しているからではないかと感じられる。

平成19年度に入り、私が孫子や諸葛孔明の兵法書を愛読し始めてから10年が経過した。そして、私が理学療法士として、また中間管理職として病院勤務時における部下や新入職員、実習学生の指導の際には必ず兵法的思考を参考にした。そのスタイルは吉備国際大学に着任後の学生指導においても変わらなかった。気がつけば、兵法的思考を学生教育において用い始めてから5年が経過していた。



今なおも世界中で読まれている『孫子の兵法』

図1. Ralph D. Sawyer 著『The Art of War』

【事例】

1. 不祥事の発生

平成19年4月、私は1年次のチューターとなった。そして早くも2ヶ月目の時点において、初めて経験する対外的なトラブルに遭遇した。

それは、1年次の必修科目である解剖学における岡山大学医学部内で実施される実習の日に勃発した。不祥事を起こした学生は合計4名であり、いずれも男子学生であった。理学療法学科が開設されて以来、初めて発生した解剖学実習に関する不祥事とあって、担当教官をはじめ多くの関係者がショックを受けた。

このことについて、“拙速さ”と“緻密で正確な情報交換”に配慮しながら理学療法学科の平

上学科長と対応にあたった。問題を起こした学生達に対しては学科長より“きわめて厳しい指導”を行っていただいた。それは、学生にとって“生まれて初めて受けるレベルの激しい恫喝”であったが、指導の内容は“医療従事者を志す人間としての心”を説いた説得力に満ち溢れた内容であったとのことであった(学生の後日談)。

そしてチューターの私は、この機会を通じて“信賞必罰”のスタイルを1年次生全体に対して周知させ、他人事ではない“明日は自分がそうなるかもしれない”ことを徹底的に説明した。

最終的に、1年次生全員に対して、今回の教訓を忘れないための対策を考え、自らが行動に示すことを提案した。結果、不祥事発生の日から1週間を待たずして、毎週1回のキャンパス内の清掃活動が自発的に行われ始めた。

2. サークルの活動の始まり

その後、問題を起こした学生を含む10名程度の男女学生が私の研究室を興奮気味に訪れ、毎週1回のキャンパス内清掃活動を4年間継続し、休日を利用した学外清掃活動などへも発展させたいという旨を意気盛んに申し出てきた。それは不祥事発生から3週間目のことであった。

当初は10名程度のグループで行われていた清掃活動であった。しかし、活動開始から3週間が経過した頃から参加学生の人数が増加し始め、4週間後には30名を超えるまでに大きく膨れ上がっていた。

学生らは毎週木曜日の1限目の空き時間を利用し、その清掃活動の範囲を大きく広げ、班ごとに分かれて活動するまでになっていた。

この頃、グループのリーダー的な存在となっている複数の学生が発生し、半ばサークル活動的な側面がうかがえた。一部学生の間では、この活動のグループ名をThree TOP Arrowsと呼称していた。しかし、この時点では私からは特にアドバイスや指導を投げかけず、あくまでも“学生の自発性に任せる”というスタイルを貫き、グループの実態把握に徹した。

3. Three TOP Arrowsの正式な発足

夏休み中は休止していたThree TOP Arrowsは、後期に入ったその日から活動は開始されていた。この時点で初めて、私はリーダー的存在

の学生を呼び出し、Three TOP Arrowsを役割分担がなされた正式な組織とする提案を行った。

彼らに対して、前述の“今後4年間の活動継続”・“学外での発展的活動”という2大事業を達成するためには役割分担を行い、役職者が有機的にThree TOP Arrowsの管理・運営を行っていくことの重要性を解説した。その際、医療や福祉の現場においても、他職種がそれぞれの役割を持ってチームアプローチを実践している事実と照らし合わせながら説明を行った。

しかし、まだ1年次生であるということもあり、医療現場をほとんど知らない彼らは一様に戸惑い、“来週までに皆で話し合ってから答えを出す”ことを申し出た。そして数日後、彼らは話し合いの結果をもとにThree TOP Arrowsの組織化を決断し、私のところに“2大事業を達成できる組織化づくりの指導”を請いに訪れた。

最終的に私と学生達とで協議を行ない、役職者の選抜と組織化が実現し、1年次生全員への詳細なアナウンスがThree TOP Arrows 広報委員より発せられ、正式な発足に至った。

4. 事例 の考察

事例 で、学生への対応内容が兵法的思考と一致している部分を以下(表2)に示す。

表2. 事例 における“その時”

不祥事そのものへの対応	
問題学生に対して	機を見るに敏 信賞必罰
全学生に対して	禁 礼 勸 信
Three TOP Arrows への働きかけ	
サークル時期の静観	腹心 耳目 爪牙
組織化・役職の決定	択材 整師 治軍

【事例 】

1. 私の“ゼミ観”

1年次のチューターの立場として、あらためて感じたことは、当然のことではあるが学生は“入学したときからチューターが決定している”ということである。一般社会の職場において、俗に“部下は上司を選べない”という表現が存在しているが、チューターと学生との関係は、非常に似ていると感じる。

これに対して、本学科の3年次以降の“ゼミ”では、前述のチューター制とは大きく異なっており、学生の希望にもとづいて学生が配分されている。このことは、“ある程度の訓練を受けた部下が、好んで部署や社長を選んで来る”という状況に似ていると私は考えている。

ただし、ゼミにおいては、チューター業務の場合のような初步レベルでの“調教的”な部分が少ない反面、学生達の期待に充分に応えるだけの経験をさせることができれば、“こんなはずではなかった”という思いを抱かせる結果に陥ることも考えられる。

平成19年度になり、私のゼミでは、小規模ではあるが、大学院生1名と4年次生2名、3年次生5名というピラミッドタイプの人員配分となっていた。このことをふまえて、ゼミをベンチャー企業的な組織に見立てたマネジメントを行い、“社員（学生）の期待以上に魅力的な創造力の豊かな会社（ゼミ）の活動”をモットーに活動を行った。

2. 基本的な“戦略・戦術”

私のゼミでは、3年前から『佐藤研究室の活動理念』を定めており、3年生にとって初回にあたるゼミの席で、必ず活動理念を全員に対して周知させている。そして、その後の2年間のゼミ活動を遂行していく中で、学生達が困って右往左往している場面に遭遇した時には、ゼミ生全員で活動理念と彼らの現状を照合させるという軌道修正を実践している。

平成19年度のゼミでは、毎週木曜日の全体会（学部3年次生～大学院生）を必ず開催し、これを“企画会議”と位置づけている。その他の曜日において、学年ごとのミーティングを必要に応じて開催している。下級生への情意面の教育は、原則としては全権を学生会長（部長クラスに相当）である大学院生に任せ、その下に4年次生から1名のゼミ長（課長クラス）を、3年次生から1名の3年代表（主任クラス）を選出して組織立った運営を実践している。また、8月上旬と12月下旬に学外での全体会（合宿）を開催しているが、平成19年度は学生会長を監督に据え、このイベントに関する企画から運営にいたるまでのプロセスを学部生に経験させ、情意面での教育や団結力の向上に努めている。

3. ゼミ生達が製作した技術書の出版化

平成19年度の4年次生は卒業研究の進捗状況が例年よりも遅れていた。3年次において幾度となく企画会議を開催してきてはいたものの、本人達にとって“魅力的な研究活動テーマ”に出会えていないのが現状であった。

このような状況の中、大学院生から何気なく提供されたヒントにより事態は劇的に急変し、あるテーマが浮上した。それは、従来の卒業研究からは逸脱している内容ではあるが、最終到達目標が“理学療法関連技術書の出版化”という夢のある企画であった。しかし、その一方で4年次生以外からの多大な理解と協力が必要とされる内容であった。

そこで急遽、ゼミでの企画会議を開催し、“4年次生が中心となり、他の全学生が必ず本企画に協力できる体制”を検討した。加えて、最終目標を達成するための意思統一が行われた。

かくして空き時間や放課後、休日を返上した学生達の活動が急ピッチで進められた。私はただ、その突貫作業を見守り、彼らのサポート役に徹した。そしてついに、作業開始から4ヶ月が経過した11月、大手の医学書籍出版業者より、“社内での企画会議をすべてクリアしたので出版が内定しました”という連絡をいただいた。

4. 事例 の考察

事例 で、学生への対応内容が兵法的思考と一致している部分を以下（表3）に示す。

表3．事例 における“その時”

運営（戦略・戦術）について	
活動理念の策定	整師
大学院生を学生会長に据える	兵権 択材
学部生主体のゼミ合宿	習練
最終目標の達成のために	
協力体制づくり・意志統一	治軍
突貫作業のサポート	哀死 励士

【まとめ】

事例 ・ での学生教育において、共通して用いた兵法的思考は、択材・整師・治軍であり、これら3つは特に重要な思考と考える。